

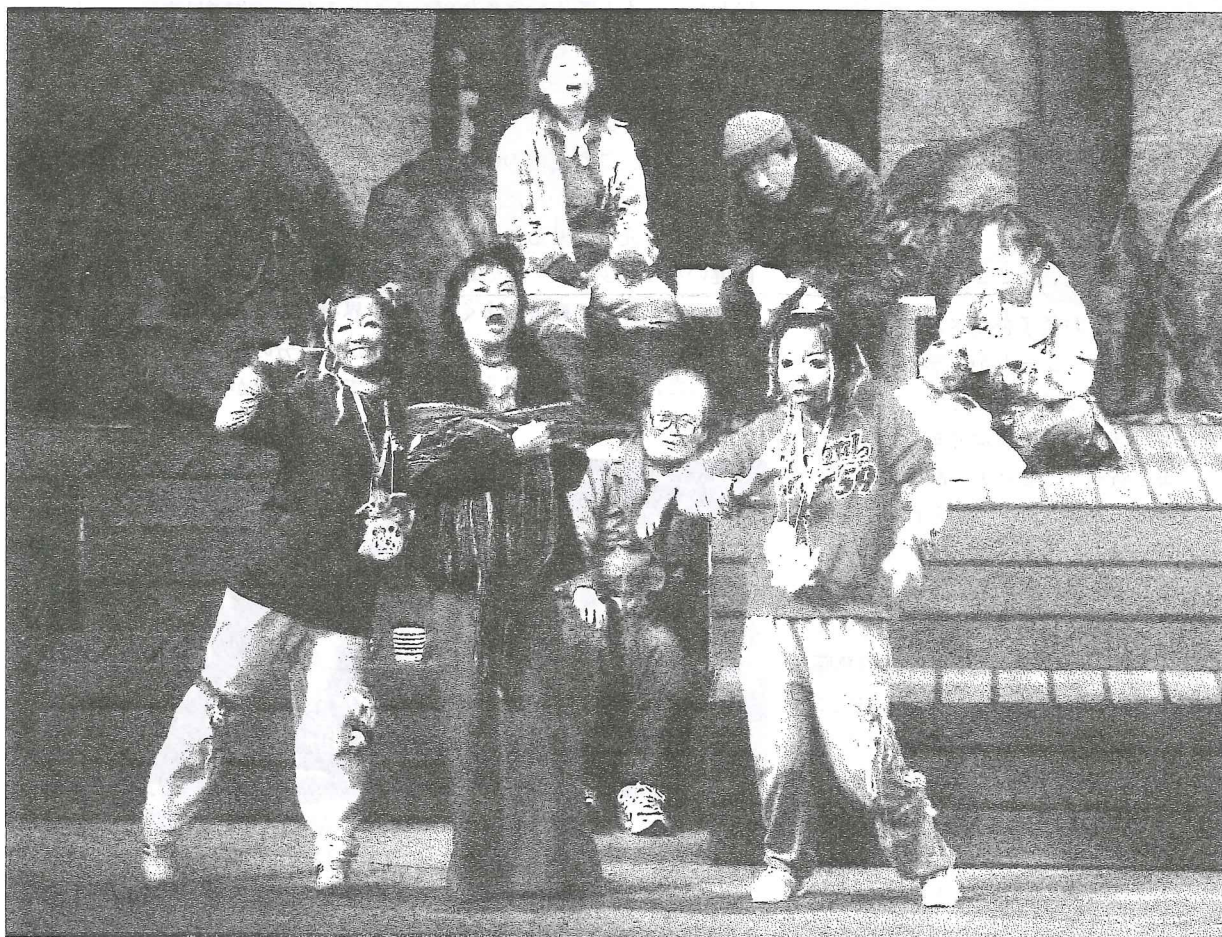
# DRAMA かながわ

《神奈川県演劇連盟》 ★横浜市中区福富町西通り52 TEL.045-261-4866

## 気になることを まっすぐ芝居にする強さ

《県演連合同公演(河童座)「セピア色のカラス」を観る》

山本忠利



第4回神奈川県演劇連盟合同公演・劇団河童座出演公演「セピア色のカラス」は、2007年2月17日(土)18日(日)の両日、神奈川県立青少年センターホールにて同センターとの共催事業として開催された。この公演の観劇レポートを前事務局長の山本忠利氏、劇団横浜にゆくりあの山口礼子さんをお願いした。

劇団河童座が200回公演記念として「セピア色のカラス」を県立青少年センターで上演した。作・演出の横田和弘から必ず観るようにといわれて、観にいった。

パンフレットによれば、56年で200回公演とあり、1年あたり4回弱になる。これには学校などの依頼公演は入っていないのだそうだからそれらを加えれば毎年5本の公演をしていることになる。専門劇団でも年4~5本の自主公演をする劇団はそう多くはないと思うが、職業を持ちながらの劇団の公演回数としてはただただ脱帽するばかりだ。

そしてもう一つ驚いたことは1985年頃からの上演作品の多くが、横田和弘の創作劇だということだ。

私の今回の感想も横田和弘の創作劇にかける執念のような一途な思いについて、私の思いを重ねてみたもので、劇評などというものではなく、どちらかといえば劇団河童座についての感想という方が正しいのかも知れない。もともと劇評など書ける柄でもないからちょうどいいのだが、横田和弘の作品にこめた思いは確かに伝わってきたから、それに応えての感想ということになる。





横田が選んだテーマはホームレスだ。ブルーシートで暮らす人々と、そうでない、まあ普通の市民？との関わりについてである。ブルーシートで暮らす人々のそこに至る人生は千差万別であろうと思う。横田がパンフレットに書くように、そこには戦争体験者、高度成長期にブルーワーカーといわれた人たち、借金地獄から逃げてきた人、出稼ぎのまま帰れない人など様々だろう。しかし今日のように弱者を切り捨てることがなかったもう少し前の時代なら、ブルーシートまでいかずに或いは別の生き方をしていた人も多いのではないかと思ったりする。

物語はこのブルーシートから学校に通う少女とその両親を中心に展開される。横田はこの設定についてもパンフレットで断っている。「家族でホームレスというのは、珍しいケースで、勿論、都合に合わせて私が勝手に作った設定です」と。そしてここに登場させる普通の人々とはホームレスの住人に毒入りお菓子を食べさせようとする高校生であり、その母親であり、ブルーシートから学校に通う子どもを見守る先生であり、裕福な家庭から飛び出してホームレスの少女と友達になるガングロの二人の同じ年頃の少女である。

物語の展開は、ホームレスに毒を盛ろうとした男子高校生とブルーシートの少女が同じ学校の生徒であり、これまで知られずにいた少女の事情が、男子高校生の登場で分かってしまう。そしてこのいじめる側の生徒の1人が川に転落して危機一髪の時に少女の父親がこれを助けるという展開になる。この人命救助事件をめぐるブルーシートの住人も、いじめる側の学生とその母親もそれぞれの葛藤を余儀なくされることになる。そして事件は、学生を助けたお礼に受け取った清酒剣菱をブルーシートの住民としこたま飲みあかした朝、川に飛び込んで風邪を引いたことが引き金になったのか、少女の父親はテントの中で冷たくなって死んでいたという衝撃的な展開を見せる。

これによって物語はいじめる側、毒を飲ませようとした学生の側の、つまり、いのちを助けられた学生の対応、生き様に物語の展開が移っていく。

こんなことをいくら書いてもそれで舞台の熱情を伝えることにはならないが、それでも横田が何を伝えようとしたかを知ってもらうために、概略を記してみたわけだが、これも横田がパンフレットで言うように「政治や経済に振り回された、犠牲者たちがたくさんいるのです。底辺で日本を支えてきた労働力や命をかけた生き様を提供してきた人たちがたくさんいるのです。」「増え続けるホームレス問題に根本的な良薬は無いのかも知れません。」「解決策の無い作品です。・・・楽しい芝居ではないかも知れません。でも、どこかにこんな社会があることを知ってもらいたい。」という思いを何

とか伝えたいと思うからである。横田はそれぞれの人物をこれでもかこれでもか書き込んでいく。

そして舞台は「2時間20分ぐらいになってしまったが、自分で書いたものは自分では切れなくて」と上演直前に話していたが、結果的には15分の休憩を挟んで3時間の上演時間にふくらんだ。観終わって振り返れば、確かに物語の設定に無理があったり、余計なものがあったり、もっと凝縮出来るのではないかと思える所も少なくないが、私は観ている間はそんなことは考えないで引き込まれて観てしまった。そしてその舞台を観ながら考えていたことは、「自分で書いたものは自分では切れなくて」と言った横田の言葉であった。思いの丈を書きたいのだ、言いたいことは全部言いたいのだという作者の気持ちが確かにそこに展開されていて、それをひしひしと感ずることが出来た。

この舞台を観た1人から「甘い」という評価を聞いた。その響きには、たいした芝居じゃないよというニュアンスがあるように感じて、なるほどそうかとも思った。が、私の中での評価は違っていた。たぶんその人と評価の基準が違って「これは創作劇なんだ」という別の価値が大事に思えたのだ。職業劇団でない集団の場合創作劇をつくっても上演回数は限られているから、それを練り直し、書き直し、文学作品としても完成度を高めるというまでにはなかなかいかない。もしそういう条件が与えられるなら、作者はきっと、もっと練り上げて、もっと緊迫感のある作品にすることは可能だろうと思うが、私は今そういう評価だけでこの作品を見たくないと思う。

私も劇作を試みたことがあって、創作することの大変さを身に試みているが、これだけの作品を書き上げる情熱とエネルギーは並大抵ではないと思うからだ。何かを書きたいという思いはあっても、作品として完成させることは誰にでも出来る作業ではない。しかし間違いなく青少年ホールの舞台には3時間に及ぶ熱い思いが展開されたのだ。そして観客の多くはその世界を受け止め、それぞれに何かを考え、劇場に入った時とは違う何かを自分の中に取り込んで出ていったに違いないと思うのだ。そしてそれこそが大事なことだと私は思うのだ。



この日観た舞台の感想と離れるが、私は最近の劇団の公演で、創作劇が少なくなっていることが気になって仕方がない。創作劇がないばかりか既存の作品の上演についても、同じ作品がしばしば複数の劇団で取り上げられる。観客も違うし、演出家も劇団を託したい・・・という、選択される作品も多様なはずだと思うのだ。そしてそれぞれの集団の個性がにじみでる、個性ある舞台を見せてほしいと思うのだ。一つの舞台を通じて観客に何を伝えようとしているのか、そういう情熱を感じさせる公演に遭遇したいとおもうのだが、なかなかそういう出会いは少なくなった、という思いがよぎる。

きわめて初歩的なことだが、劇団を組織して演劇を創ると言うことは、伝えたい何かがあって、伝いたい誰かがいて、そのために作品を書いて、或いは選択して、芝居を創る作業は始まるのだと思うが、実際にはそのところが逆転してしまい、「何かないかなあ」という作品探しから始まる作業になっているように思える。



そういう、衰退しつつあると思える演劇状況の中での今回の公演は、「私たちは言いたいことがあるのです、このことが気になって仕方がないのです、だからこういう創作劇を創って一緒に考えてみたいのです」と、作者のストレートな意志を劇団という集団の意志にして見せてくれたわけで、そこに無条件で大きな拍手を送りたいと思うのだ。

神奈川県演劇連盟の中でも劇団河童座は今いちばん元気がある集団だと思っているが、それは毎年4本も5本も上演しているからではなく、世の中の不条理について言いたいことがあって、芝居にして問題提起したい事柄があるから、そして演劇が社会的役

割を背負える文化的手段だから、その手段に託して、劇団の若いメンバーが今を精一杯生きているからだと思うのだ。

そういえば横田は最近、みなと横浜演劇祭のオープニングで挨拶し、「平和をつくる力は政治ではなく演劇ではないかと思いはじめている」と話していた。その確信は彼が演劇の力を信じていることのすばらしさであり、それこそが彼の創造の源泉なのではないかと思うが、思いの丈を言葉にし、言いたいことを言葉にして、創作劇を軸に据えた芝居づくりを続けてほしいと期待してやまないところである。

# 劇団の基本姿勢が 暖かい劇風景

劇団横濱にゆうくりあ 山口礼子



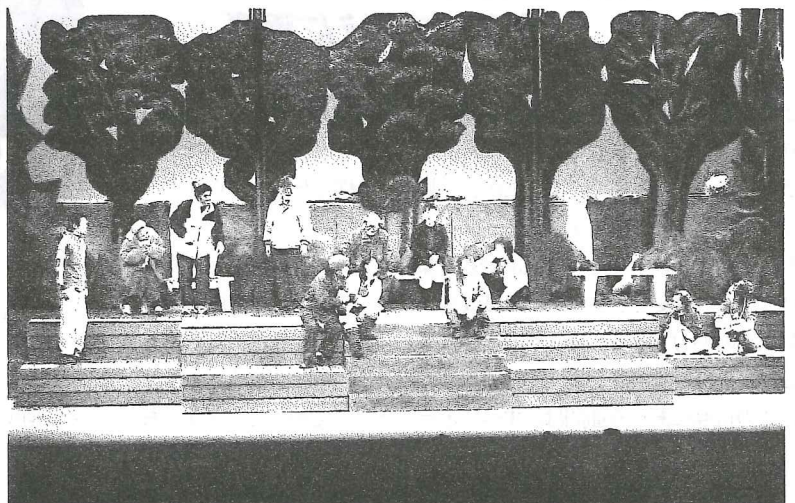
この作品は同劇団の200回目の公演であるうえに、リニューアルオープンされて間もない青少年センターのあのまわる舞台での上演ということもあって、以前からなにかわくわくする様な楽しみにしていた公演でした。

実際の舞台も期待を裏切ることなく、3時間という大作でありながら時間を追うごとに作品にのめり込んでいき、最後にはあちらこちらから聞こえてくるすすり泣きにこちらもつられてしまうほどでした。

ホームレス社会の問題をテーマにした作品ということでしたが、私が「ホームレス」という言葉に対して抱いているどこか世間を拒絶しているような孤独なイメージとは異なり、河童座らしい人情味あふれるあたたかい内容でした。作者の意図とはズレた見方をしてしまったかもしれませんが、公園で生活をしているホームレスの人達の中に、かつてオンボロ長屋に住む、貧しいがあたたかい家族とそのご近所づきあいを重ねて見てしまいました。それは最初のシーンで、それほど深刻でない動機でホームレス志願をした男性をなんだかんだ言いながらも仲間に入れてあげたことや、川に落ちた少年を助ける為に、身の危険を顧みず冬の川に飛び込む親父さんの姿、またそれを同じホームレスの仲間たちが皆我がことのように心配し、無事助けられたことを喜ぶこと、さらにそのことが原因で親父さんを亡

くしてしまった時には、皆でささやかながらも精一杯のお葬式をあげ、心から悲しむこと・・・そんな感情の共有が、今ではすっかり失われてしまったかつての地域社会を思い出させ、見る側も素直に感情移入してしまったのかもしれないと感じました。むしろ公園の外で普通に生活する人々、本当の自分を家族にすら偽っている悪ガキ達や一人で公園にのり込むその母、そしてお嬢の後見人でありながらそれを世間に隠している為かどこかおどおどしている優子、彼らの方が皆どこか孤独でさみしげに見えた。だからお嬢を慕うやまんば二人も（彼女らすごい！本当に渋谷から連れてきたみたい）実は裕福な家庭に育ちながら孤独を抱え、夜の街を彷徨ったあげくこの公園にたどりついたのだろうか。

そういえば、河童座の芝居は登場人物が皆優しく、見終えた後、ほのぼのとした気持ちにさせる作品が多いように思われます。それは作者の人柄もさることながら、長年続けているファミリーシアターや学校等への出張公演などの地道な活動から育てられた劇団自身の持つ気風がそうさせているのかもしれない。個人主義がすすみ、人と人との関係が希薄になってきている今日だからこそ、この雰囲気劇団員を増やし、この様に大勢の観客を惹きつけているのだと感じました。楽しい舞台をありがとうございました。





# 「劇団ひこばえ」って なあーに?!

地域演劇教育集団「劇団ひこばえ」顧問 村上芳信



## 1. ひこばえの生い立ち

2001年に、緑区民ミュージカルにつづいて2番目となる青葉区小中高生ミュージカルが結成されます。その青葉区小中高生ミュージカル「手古奈」公演の終了後、「ミュージカルの時期だけでなく、年間を通して演劇をや

りたい。」との声が上がリ、出演者有志の小中高生によって自主的に「青葉区ミュージカルワークショップ」が結成されます。最初から学校の演劇部ではなく、学校の枠や年齢の違いをこえた地域を基盤とするユニークな演劇集団としてスタートしました。

当然にも学校終了後に集まってきて、練習は夜間・休日におこなう厳しいものとなります。それでも「年が離れた仲間と刺激し合える」「部活動は伝統をかたくなに守っていてやりたい劇ができない」「学校に演劇部がない」と、それぞれがいろんな気持ちで参加していますが、「演劇大好き!」というのが共通するものです。

## 2. 地域演劇教育組織として 劇団ひこばえに再編

2002年4月には青葉区小中高生ミュージカルという大きな木の切り株の側から、元気よく萌え出た若葉の新芽という意味を込めて「劇団ひこばえ」と改称していましたが、「劇団」と称したことからいろいろ誤解や問題がでてきました。

そこで2003年4月に地域演劇教育集団「劇団ひこばえ」と正式に名称・組織の改変をしました。組織改変は、その管理・運営は保護者と演劇教育の協力者とでつくられた「ひこばえ運営委員会」が主管するものとなった点です。ひこばえ運営委員会の役員や、劇団ひこばえの子どもの指導にあたる顧問は、すべてボランティアでやっています。あくまでも演劇教育のために地域に組織された教育組織であることを明

確にしました。

もちろん質の高い劇づくりを目指していますので劇団形式をとって、プロの演劇人の指導を受けます。しかし演劇人を養成することを目的とする劇団ではなく、演劇教育によって子どもを育むことを目的としています。

## 3. 劇団ひこばえの現状

午後6時になると稽古場として借用する社会福祉施設の多目的ホールにいろんな学校から、小学生は5年生以上で中学生、高校生が集まってきます。団員の出身区は青葉、緑、港北、神奈川などで、稽古場の行き来が大変です。稽古は週3日が平均です。公演直前の1、2週間は毎日練習になります。学校も違うので統一したテスト期間中の稽古休みは置くことができません。それでも勉強と稽古は両立を原則としています。

稽古は夜の8:30まで続きます。その間、演出を担当している講師の先生の厳しいダメだしの声がとびます。小学生であろうと容赦はありません。それを顧問と稽古場管理当番の運営委員会の保護者が見守ります。これらの顧問、保護者の活動は、すべてボランティアでおこなわれています。区民ミュージカルから参加したメンバーが多いからでしょうか、ダンスのときはより生き生きしているように見えます。稽古のまともは劇場ホールのある場所で合宿をします。発表する公演の脚本は団員の創作脚本が多くなりました。

ひこばえへの加入は登録団員制となっていますので、まず団員登録をします。つぎに公演ごとにキャスト募集がありますので、希望者が応募してキャストになります。2007、3月現在の登録団員は36名。小学生3名、中学生16名、高校生13名、高卒以上4人ですが、中学3年生が多いので4月からは高校生が20名を超えて、高校生が中心の劇団となります。



## 4. どんな演劇活動をしているか

つぎにひこばえの演劇活動をまとめてみました。かなりハードなのですが、横浜では学校演劇と地域演劇とが融合する状況になっており、その交流する中心にひこばえの活動があるためです。



① 地域に根ざす演劇表現活動をします。

米軍ジェット機墜落事故でなくなった母子を追悼する平和ロックソーランなどの表現活動、地域の高齢者との交流を目的とする福祉公演活動など、地域に根ざす演劇表現活動に取り組んでいます。

② 学校演劇の中学校演劇発表会に特別参加します

学校演劇である横浜市中学校演劇発表会（夏、冬大会）に特別参加しています。昨年は全劇研神奈川大会の上演劇を担当しました。

③ 地域演劇として区民ミュージカルへ参加します。

青葉区、緑区、港北区、神奈川区、鶴見区などの区民ミュージカルに参加しています。昨年はバンクーバーで開催されたアース世界

青少年芸術フェスティバルに派遣されたアースよこはまミュージカルに参加しました。

④ 劇団として自主公演を行います。

劇団として年間2回（夏の自主公演、春のひこばえオンステージ）の自主公演を行います。2006年度の公演は、夏は「眺める」、春は「逢魔が刻」「夢逢」でした。

⑤ 神奈川県演劇連盟の加盟劇団として

活動します。

地域演劇づくりを目指し、神奈川県演劇連盟の所属劇団として活動しています。

劇団ひこばえ「HIKOBAE ON STAGE 2007」が07年4月1日県立青少年センター多目的プラザで開催されました。勝碯、荒井の両名に観劇レポートをお願いしました。



「逢魔ヶ刻」

作：原田萌／演出：小川新次

「逢魔ヶ刻」とは、曖昧模糊とした時（夕方）、この芝居では人間か鬼か妖しかはっきりと区別できない。登場人物(?)達全ては人間の心の闇が現出せしものと言う解釈。

邪魔な愛と情念に依って展開する多分江戸時代の話し、観終わって受けた感じは「新羅生門」の様、イーハトーボの劇列車の思い残し切符やTVの地獄の門番いづ子を連想させる。

驚くべき事は、この作者はなんと高校生！参考にした文献が無かったとするならば、その感性は末頼母しい劇作家でしょう。只、難を言えば、演じている若者より、この作品に関わっている大人達の思いの方が強く、役者が理解して演じていると言うよりは、操られて台詞を言わされている傀儡の様に観えてしまったこと。何故なら、終わった時の「ありがとうございました」の挨拶時の明るい声と屈託のない笑顔の安堵感を見せられたからである。

せめて照明や衣裳などももう少し演じやすい環境を裏方としては創ってあげるべきではないだろうか……。

只、刀の帯刀と抜刀は正確でした。

劇団蒼生樹 勝碯若子



「夢逢」

作：熊手竜久馬／演出：井上学

劇団ひこばえの舞台をはじめて見せていただいた。時間の関係で三部構成のうち第一部「夢逢（ゆめあい）」だけを観た。

私の個人的な趣向だが、ファンタジーの世界、現実と夢の世界を往復する劇はなかなかなじみにくいのだ。

とはいえ、すこし荒削りで稚拙な部分があるがわかひひとたちの意欲あふれる舞台には好感がもてた。高校生を中心に一部、中学生を含む若者たちのこの劇団には未来があると感じた。若い人たちの意欲と優れた指導者に恵まれたこの劇団が県演連の仲間としてあることが心強い。

あくまでもわたし個人の希望だが、ファンタジーの世界に心躍らせるのと同様に

高校生をとりまく日常生活の中の切実な問題と向き合った作品ができれば、この劇団はいい舞台を見せてくれるのではないかと期待しました。

これからは楽しみな劇団です。

横浜演劇研究所 荒井賢一



# 芝居塾始まる!

横濱ゆーくりあ代表 坂下優一

この記事は、芝居塾の始まる前に県演連内にアピールするため、お願いしたものです。(編集部)

いよいよ、2007年5月から、芝居塾がスタートする。

芝居塾は、最近多くの劇団が悩む、座員不足を解消する、一つの仕掛けになるかもしれないし、集客にも結びつくかもしれない。それよりなにより、地域の演劇の発展につながる企画だと思っている。

それは、我々県演連の発展だけでなく、演劇の底辺だと思われる、高校演劇にとっても大きな力となると信じているからである。

## 芝居塾とは・・・

一つの作品を、ある劇団と高校生たち講習生(?)と共に作り上げるという企画である。

劇団員と高校生が、入り乱れて一本の芝居を創り上げるということである。

講師先生が、高校生を集めて一本の芝居を創るといふ、よくある講習会とは違い、劇団の創作活動の中に高校生が、参加するのである。

高校生にとっては机上の講習会とは違い、キャスト、スタッフワークだけではなく、制作活動を含めた、学校では経験することの出来ない、生の芝居創りの現場に参加するわけだから、得るものは、限りなく多いはずである。

そして、劇団にとっては新しい、これからを期待される演劇人たちとの出会い、これが何しろ大きな財産になるはずである。新しい座員確保へもつながるかも知れないし、自分達の公演の集客につながるかもしれない。さらに、みっともない事はできないとの思い

が、劇団のクオリティをたかめるかもしれない。若い人たちとの触れ合いが、《今》を感じなくてはならない我々にとって、大きな財産にならないはずはない・・・。魅力は、こと欠かない・・・。

双方にとって得るものが多い企画、それが《芝居塾》・・・。

確かに、ふだんとは違った芝居づくりの環境を強いらられるかもしれない。楽しさだけで無く、苦労も増える事になると思う・・・。

ただ待っているだけでは、状況は変わらない。座員募集のチラシや、ホームページの募集告知では、限りがある。なにか、能動的な仕掛けをしてゆかなければ、座員も観客も増えては行かない。

この芝居塾の可能性に、期待するところは大きい。

やはり、地域と関わってこそ、地域の劇団・アマチュア劇団だと思ふのだが・・・。

なお、青少年センター・多目的プラザを使つての企画である。これもセンターの青少年対象の企画・さらに多目的ホールの認知などの、思惑と一致して誕生した経緯がある。

演劇資料室・秋のフェスティバルへの多目的プラザの提供・合同公演・演劇博覧会・・・と、青少年センターとの、共同作業が増えてきている。

これはセンターをアマチュア演劇のメッカに・・・との思いは、センターの意向と一致している。その期待に答え、この企画も何と成功させたい。

第一回目の「芝居塾」は、劇団横濱にゆーくりあの「ガス灯の下で」で、幕を開ける。

## ★★★スケジュールの抜粋★★★

	残日数	稽古場	トピック	大道具	照明	音響	衣裳	小道具	チラシ	チケット	当日パンフ	その他	
5月	2 水	115											
	7 月	110											
	12 土	105	研修室	募集完了									
	13 日	104		監生確定									
	20 日	97	練習室	顔合・配本	適正調査	適正調査	適正調査	適正調査	適正調査	提出	適正調査	適正調査	オリ本印刷 名簿作成
	26 土	91	多目的プラザ	初版脱稿	一次配役	担当決定	担当決定	担当決定	担当決定	修正	担当決定	担当決定	配本
6月	31 木	86							最終校正				
	3 日	83	多目的プラザ		演出提案				完全版下				
	11 月	75							印刷完了				
	15 金	71							学校発送				
	16 土	70	多目的プラザ		図面確定				役員配布			発送確認 配布説明	
	17 日	69	多目的プラザ		材料確認					作成	(企画)		
7月	23 土	63	分館地下						修正				
	24 日	62		装置予定日	製作								
	28 木	58	分館地下										
	30 土	56	分館地下	装置予定日	製作								
	1 日	55	分館地下	装置予定日	製作					最終校正	(企画)		
	7 土	49	練習室					付帳提出	付帳提出	印刷依頼		チケット作成	
8月	12 木	44	分館地下										
	14 土	42	分館地下										
	15 日	41	分館地下										
	16 月	40	分館地下										
	21 土	35	練習室							チケット配布		企画	
	26 木	30	分館地下							状況確認	状況確認		
9月	28 土	28	分館地下										
	29 日	27	分館地下										
	2 木	23	分館地下										
	3 金	22											
	4 土	21	多目的プラザ										
	5 日	20	分館地下										
10月	9 木	16	分館地下										
	11 土	14	分館地下										
	12 日	13											
	16 木	9	分館地下										
	18 土	7	分館地下	リハーサル								最終校正	
	19 日	6	分館地下	リハーサル								印刷依頼	
11月	21 火	4	分館地下										
	23 木	2	多目的プラザ										
	24 金	1	多目的プラザ										
	25 土												
	26 日												